

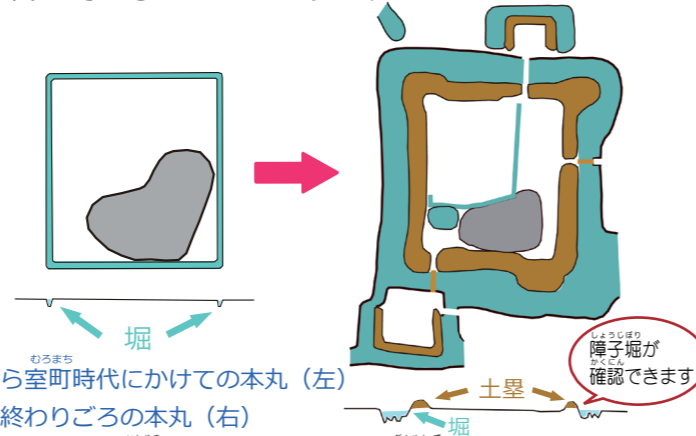
小田城の移り変わりとおだじょう

(1) 小田城の移り変わり

小田城がいつできたのかは不明ですが、14世紀ごろには現在の場所に元となる館ができていました。戦いの中で小田城は何度も造り替えられたことが分かっています。14世紀ごろに造られた小田城本丸を囲う堀は、幅4メートルほどで、それほど大きくありませんでした。しかし、戦乱の時代になると城の守りが強化され、戦国時代の終わりごろには幅約20~30メートル、深さ約4~5メートルもある堀や、幅が10~15メートルの土塁が造られました。激しくなる争いに対応して城を造り替えていることがわかります。



発掘調査の結果から考えられる、戦国時代終わりごろの小田城の姿 (イメージ)



鎌倉時代から室町時代にかけての本丸 (左) と戦国時代終わりごろの本丸 (右)
水色は堀、茶色は土塁、灰色は石敷を、図の下にある線は地形の断面図を示しています。改修により、守りが強化されたつくりとなっています。

(2) 小田氏の生活の様子

発掘調査では、大型の建物や池跡が確認されているほか、中国から輸入された陶磁器、また岐阜県や愛知県など東海地方で焼かれた陶器などが見つかっており、小田氏の華やかな生活の様子をうかがうことができます。



輸入陶磁器
座敷に飾られる大皿や壺のほか、茶道具が見つかります。



国産陶器
現在の愛知県や岐阜県で作られたもので、当時の物流がうかがえます。



土器
常陸国で焼かれたものです。使い捨ての杯として使われた土器(かわらけ)が見つかり、多くの人が集まって儀式や宴会をしていたことがわかります。



漆器碗、すずり、鍛冶の道具、鉄砲玉、碁石、よろいの金具、矢じり、下駄、茶うす、かわら、石造物
木製品・石製品・金属製品等
当時の生活の様子を物語るものです。鉄砲玉や矢じりなどの武器やよろいの金具からは、激しい戦いがあったことがわかります。

(3) 現在の小田城

小田城跡は、その歴史的重要性や残りの良さから、昭和10年(1935年)6月7日に国の史跡に指定されました。その後、平成21年度(2009年度)から7年間かけて発掘調査の結果を元に歴史ひろばとして復元しました。小田城跡は中世の歴史や文化について教えてくれる貴重な遺跡です。私たちはこれからも小田城をはじめとしたつくば市の貴重な文化財を守り、未来に伝えていかななくてはなりません。

おだし 小田氏とおだじょう

中世のつくばで活躍した小田氏

(1) 小田氏のはじまり

小田城跡は、中世とよばれる鎌倉時代から戦国時代にかけて、約400年間15代にわたり常陸国(現在の茨城県の大部分)南部に勢力を持った小田氏の居城跡です。

小田氏の初代である八田知家(1142-1218)は、鎌倉幕府を開いた源頼朝の信賴があつく、合戦の指揮官として中心的な役割も担いました。また、最初の常陸国の守護となり、つくば市など霞ヶ浦西側一帯で勢力を持ちます。知家の子孫も守護職を引き継ぎますが、執権に北条氏がつくと、小田氏の土地の一部や守護職は北条氏に奪われてしまいました。



空からみた小田城跡。中央部分が城の中心である本丸跡

キーワード解説

守護・地頭・執権ってなにかな?
鎌倉幕府は有力な御家人を守護や地頭として全国各地に置き、政治体制を整えました。
※守護… 国ごとに置かれ、国内の軍事・警察・御家人を統率する武士のこと。
※地頭… 私有地などで年貢(税)の取り立てや犯罪の取りしまりにあたる武士のこと。
※執権… 鎌倉幕府で将軍を助ける最高位の仕事。源氏の将軍が3代でとだえると、幕府の実権をにぎりました。

キーワード解説

いつから小田にいるの?
小田氏が小田を拠点としはじめたのは、初代知家の時代とも、「小田」を名乗り始める4代時知(1241-1293)からとも言われています。

(2) 南北朝時代と小田氏

南北朝時代になると、小田氏は南朝につき、後醍醐天皇の信賴があつかった北畠親房を迎えたため、小田城は南朝の一大拠点となります。親房は、南朝が正しいと主張した『神皇正統記』を小田城で書きました。しかし、北朝軍との戦いに敗北してからは、北朝の足利尊氏に従うようになりました。

キーワード解説

南北朝時代って?
現在の奈良県(南朝)と京都府(北朝)の南北それぞれに天皇がいて朝廷があった時代のこと。

(3) 戦国時代の小田氏

南北朝が統一された後も、関東地方では大きな戦いが何度もあり、戦乱の時代に突入しました。小田氏も争いにまきこまれながら、つくば市周辺で勢力を持ち続けました。

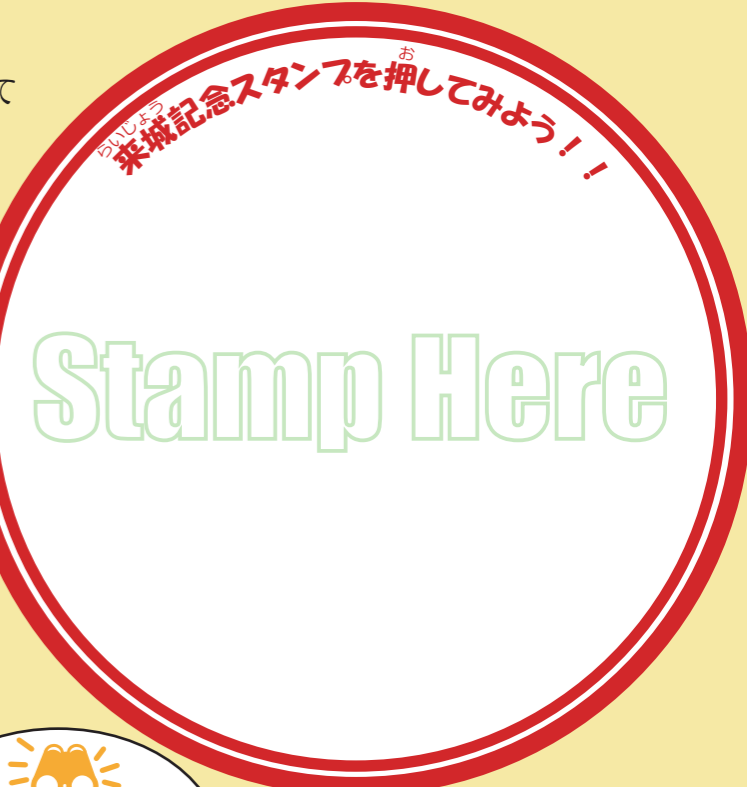
戦国時代になると、相模国(現在の神奈川県)の後北条氏と、越後国(現在の新潟県)の上杉氏が、関東地方の支配をめぐる激しく争います。小田氏は味方していた上杉氏を裏切って後北条氏につきますが、永禄7年(1564年)上杉氏側に攻められて小田城を失ってしまいました。まもなく小田城を奪い返しますが、永禄12年(1569年)に常陸国の北部にいた佐竹氏や、桜川市の真壁氏と戦って敗れると、以後小田城を取り返すことはできませんでした。

これ以降、佐竹氏が小田城を支配する時代が約30年続きますが、慶長5年(1600年)の関ヶ原の戦いで徳川家康が政治の実権をにぎると、佐竹氏は出羽国(現在の秋田県)に支配地を替えられ、慶長7年(1602年)に小田城は使われなくなりました。

約4千年前	約1500年前	約2400年前	約1700年前	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀	11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	20世紀	21世紀
原始		古代				中世			近世		近代		現代					
旧石器	縄文	弥生	古墳(飛鳥)	奈良	平安	鎌倉	南北朝	室町	戦国	徳川	江戸	明治	大正	昭和	平成	令和		

小田城跡 歴史ひろば案内図

小田城は、戦国時代以降、戦いが激しくなるにつれて、守りを強化するための工夫をこらして何度も造り替えられていきました。その一方で、本丸の建物や池の配置は小田氏の高い格式を物語っています。
小田城跡歴史ひろばでは、発掘調査で確認した戦国時代の終わりごろの地面を、厚さ1メートルの土を盛って守るとともに、確認した建物跡や池の跡などを、その真上に復元・表示しています。堀は埋まっていた部分を掘り直し、土塁は本丸の地面から2メートルの高さに盛っています。



※見学する時は、ケガに気をつけましょう

ちよこつと用語解説じゃ

- 曲輪：堀や土塁で囲まれた、建物や広場のある区画のこと
- 本丸：曲輪の中でも、とくに中心となる曲輪のこと
- 虎口：城の出入口のこと

おだ うじはる
15代小田氏治

9 遺構展示室

室町時代以降、土塁と堀が外側に広がっていく様子を、壁や床で示しています。

8 建物域

城主の屋敷などがあった空間です。礎石建物は茶色、掘立柱建物はベージュ色で示しています。

礎石建物：石の上に柱を立てて造る建物
掘立柱建物：地面に掘った穴の中に柱を建てて造る建物

駐車場... **P** 身障者用駐車場...

トイレ(多目的有)... 休憩所...

出入口...

障子堀

障子堀にはヘドロなどがたまっており、取めてきた敵の足止めをしました。

7 西池

元は南北40メートル、東西20メートルほどの広く浅い池を、城主が小田氏から佐竹氏へ替わる際に狭く深い池に改修されました。南西虎口を設置するための工事と考えられます。東池とは異なって岩が置かれており、現在は池の範囲に小石を敷いています。

6 南西馬出曲輪

馬出とは、軍勢を集めておき、攻めるにも守るにも使用された曲輪です。約50メートル四方の大きさで南西虎口を守るために造られました。

1 北堀・北橋

本来の堀底は、「障子堀」とよばれるデコボコ状で、現在より2メートルほど深いものでした。橋は、はじめは木橋でしたが、戦国時代の終わりごろには土橋に造り替えられました。

2 東堀・東橋

小田氏時代の大手口(正面の出入口)と考えられ、2回以上造り替えられていることがわかっています。はじめは木橋でしたが、戦国時代の終わりごろには木橋と土橋を組み合わせたものになりました。

見晴らしポイント

土塁と堀に囲まれた本丸の様子を一望できます。

4 東池

庭園の池で、底には石が敷いてあります。「洲洪」(小石を敷いた出っぱり)もありました。発掘調査で、付近から建物跡や大量のかわらけ(使い捨ての杯)が確認され、景色を眺めながら宴会を催したものと考えられます。

3 四阿

発見された建物跡の柱位置や大きさをもとに、設置された休憩施設です。

5 南西虎口

発掘調査で見つかった石垣と門を型にとって再現しています。虎口・橋とともに戦国時代の終わりごろに新たに設置されました。門は櫓門(見張りのための高い建物がついた門)で、虎口は土塁を削り、石垣には石塔や石仏なども利用されていました。

見晴らしポイント

涼台の名前で親しまれ、城跡の南側を一望できます。

大量のかわらけ

東池へ続く溝跡で出土しました。

